久里浜における我が青春時代を回想する

田中　憲明　空自57

編集委：本稿は、前静岡偕行会会長で防大1期生の阿部順治様が編集された『入校70周年記念　保安大学校想い出』（令和6年4月1日）に収められている田中憲明様の記事です。

田中様は空自第二術科学校長を最後に退官。65歳から4年間の米国ユタ州での大学就学期間を含み22年年間の米国でのビジネスを終え、令和4年末に帰国。現在は終の棲家を原宿として週2回の空手の稽古を後輩たちと楽しんでおられます。

はじめに

あと少しで齢90年にもなろうとする私の人生を総括して、最初にして最大の転機は、設立当初の第1期生を志願し、合格し、当時久里浜にあった保安大に入校したことである。

人生における数多の選択の中で、保安大への入校の選択こそは、間違いなく私の人生で最良のものであったと確信しているので、このことについて以下順次回想する。

1　保安大学校進学決定にいたる経緯（当時の家族と親族の状況）

父親は、敗戦後GHQによって警察行政が大きく変革されるまで福岡県警察官であった。しかし、国家警察から自治体警察への変革に伴う混乱が一介の警察官（たたき上げで巡査から警部にまで昇進）であった父にも押し寄せ、人生を大きく揺るがしたのであった。

敗戦当時、国民学校5年生で10歳だった私には、3歳年上の兄、妹が二人、弟が一人の4人の兄弟がいたが、1年後にはさらに妹ができて、私が高校3年の秋に保安大に願書を出したころ、我が家は6人兄弟の大家族になっていた。

父は、警察改革の2～3年後には整理退職の勧奨により警察官を辞職し、千代田火災海上の保険屋となって、必死に働いていた。さらに父は、この時期に福岡市の百道の浜の閑静な場所に土地を借り、家を新築したのである。

兄は九州大学法学部の3年生、末っ子の妹が小学校の入学前の時期である。父は兄と私に家計のことは一切話してくれず、私の大学進学に関しても、言い出し難かったのか積極的な発言はなかった。

我が家に最も近い親族の一つに、母の姉の嫁ぎ先で義理の伯父が東京で製薬会社の社長をされていたが、その家族は男ばかりの3人兄弟がいた。長男が陸軍士官学校第60期生で卒業直前、次男が海軍兵学校を受験して合格したばかりで入校前に敗戦になった。次男は戦後東大経済学部に入学して野球部のマネージャーをした上で、卒業後は国策銀行のエリート社員として活躍をした人だったが、明朗闊達、頭も好くて親切な青年で私が最も尊敬した従兄であった。

私が高校3年の夏休みには福岡に来ていたので、数学の難問題の解決のコツを懇切丁寧に教えてくれた。お陰で、私は数学の難問を解くのが痛快で、以来、数学が好きになったのである。

そうこうしているうちに、保安大の設置が決まり、学生の募集が始まった。警察関係者の間で、保安大要員適齢者の子弟がいるところへその情報が手配されたのか、夏休みが終わろうかとするある日に、父が保安大の募集要項が記載されている新聞を持ち帰ってきて見せてくれた。保安大の募集要項の中に旧海兵の制服に似たネービーブルーの詰襟、蛇腹の制服だと見た瞬間に、尊敬する従兄とイメージがダブった。

それはともかくとして、三つ違いの兄と次男の私は、すべての学用品は兄のお下がりだった。大学の進学についても、同じ九州大学ではまた〝お古〟ではないか、それは嫌だ！実家から跳び出す唯一のチャンスは大学進学である。家の経済状態も決して良いものではないと密かに感じていたので、保安大が俄かに現実味を帯びて、眼前に迫ってきたのである。

考えてみれば、昭和9年度生まれの我々は、小学校という名の初等教育機関に籍を置いていない。初等教育では入校の時から卒業時まで、国民学校生徒であった。次の学校は、占領軍が強制的に押し付けた教育制度改革の中で新しい中学校の1期生として入校したのである。新しい学校なので建物もまだなく、たまたま後年進学することになる旧制の「中学修猷館」の建物に間借りする生活をほぼ1年間過ごして、2年生から新校舎で過ごすことになった。この

部分もなんだか保安大の小原台への移転に類似している。

2　入校前日に泊まった久里浜会館はいかにも〝梁山泊〟

入校者たちは、入校日に出頭するためには近くのホテルに予約して前泊するしかない。学校側からの紹介もあって、京浜急行「久里浜駅」に最短の宿泊施設に前泊した。

多くの若猛者たちが集って、さながら梁山泊の様子であった。特に同じ部屋の宿泊者の中で目立ったのは、柔道の水野智之君と泥亀の小林秀雄君、それぞれ武勇伝を披露して興奮で眠れぬ夜を過ごした。

私は、高校3年で始めたボクシングのことを自慢しながら皆に紹介したが、これが空手部創設の第一声であった。

3　久里浜学生舎での生活

田舎者の私にとって〝軍隊の兵舎〟は、このようなものだと思っていたので、これが後日、小原台に移って立派な学生舎内に入った時、これほど大化けするものかと驚いた。それにしても久里浜の学生舎は木造の2階建てのそれぞれを二つに分けて、さらにそれらを自習室と寝室に分け、寝室部分は2段ベッドで100人分、自習室は長机に長椅子であり、一瞬度肝を抜かれた。

地震に慣れない九州出身の私は、真夜中に地震があるたびにベッドから出たが、ドシンという地響きを立てて上段ベッドから床に落ちても怪我もなく起き上がって再び上段ベッドに滑り込む者、さらには寝言、物凄い鼾音など、それらも昼間の訓練で疲れた体には子守歌のようなもので、慣れるにはさして時間もかからなかった。

4　学生生活と我が人生に対する影響

(1)　規則正しい団体生活

これまでの自宅における自堕落な生活から一変して、ラッパの轟音と共に起床し、定まった時間に勉強し、運動し、腹を空かせた体に十分なカロリーを食し、疲れ切った体をラッパの轟音と共に就寝する、このように規則正しい生活を我等青年の間に数年間経験することが如何に大切であるかを痛感させられた。

(2)　保安大校友会運動部空手道部の創立

創立されたばかりの自衛隊幹部養成学校での生活は、〝無〟からのスタートである。やることなすこと、全てが初めてのことであったが、将来の自衛隊の幹部として、特に、校友会運動部には〝全員参加〟のモットーがあった。これはスポーツを通じて気力・体力及び社会性を体得しなければならないとすることから生じた捉みたいなものである。

保安大においては、学生の自主性を尊重した校友会の中に運動部門と文化部門とを置いて、活動を開始しようと入校訓練が終わったころから議論が始まり、なんとか恰好が着いたところで正式に校内に校友会が発足したのが、1953（昭和28）年11月3日であり、当初は剣道、空手、ラグビー、サッカー、バレー、バスケット、野球、テニス、短艇、体操それに陸上競技の11種目、文化部は哲学研究、映画、写真や英会話など8種目であった。

私は、遠山、向吉、石松、松本、安藤らと語らい、空手道を始めることを決めた。一般学生には、時、所にこだわらず、必要な経費も他のスポーツと比較にならないくらい少なくて済む、また何よりも、自衛隊のモットーである「専守防衛」を基本とする武道であると説いて勧誘した。

宣伝が功を奏して、当初入部希望者は100名近くにも及んだ。その後、新たに柔道、射撃、アメフット、ハンドボール、卓球、山岳などが加わるに連れて部員数が少なくなっていったが、それでも部員数でいうと常に大世帯の部であった。

さて部は作ったものの、空手の経験者がおらず、大学で空手を齧ったことがあった小田村2陸佐と町道場での経験がある助教の中村3陸曹に手ほどきをしてもらった。もちろん、正規な道場などがあるはずもなく、保安隊通信学校の小砂利の混じった運動場の一角で、裸足で基本のその場突き、蹴りの動作、前進しながらの追い突き、逆突き及び前蹴りを繰り返すだけだった。

5　武人としての修養

防大入校時に、私の戸籍に士族とあったわけではないが、私が国民学校生であったときから、母は、我が田中家は名字帯刀を許された7代続いた庄屋であったと誇らしげに話してくれたことがあった。故郷の傾きかかった古い屋敷にたまに帰郷して

屋敷の中を探検して回ると沢山の日本刀や渡来銭がごろごろ転がっていたので、もしや我がご先祖様は倭寇の残党ではなかったかと想像していたものである。

父は巡査からたたき上げの警察官であり、記憶にあるかぎり剣道は武徳会の5段錬士であった。謹厳実直そのもので忠君愛国心の高い人であった。

父の出身は佐賀の鍋島藩の近くで多分に〝葉隠れ武士〟の影響を強く受けていたのであろう。「武士道と言うは、死ぬ事と見つけたり」的な言動挙措の日常であった。

また、私は、1944（昭和19）年8月20日の夕方、中国から北九州に来襲したB-29機の編隊に対して陸軍航空第4戦隊の2式複座戦闘機（屠龍）野辺軍曹―高木兵長機が第2梯団1番機に体当たりを敢行、体当たりの際に飛び散った破片が後続の2番機に当たり、B-29機×2機を葬った現場を警察官舎の座敷の下に作った防空壕から這い出して目撃したのである。

「斃れて後止む」武士道精神を実感した瞬間であった。乗員の潔さとその精神の強さに驚嘆したものである。この体当たりのことは今でも脳裏に焼き付いているが、このことが間接的に保安大への志願にも結び付いている。

敗戦の直後から、柔道を町道場に通って習い、高校では空手を教えてくれるところがなかったので、止むを得ず、ボクシング部に入部して格闘技に熱中した。

保安大に入学するに際しては、軍人であるからには一生続けられる精神性の高い、日本の武道が良いと照準を定めていた。その上、空手の場合、「空手に先手なし」いわゆる専守防衛の精神が日本の安全保障戦略に最もふさわしく、特に相手も必要としないし、好きな時間と場所で演練できるし、四肢をバランスよく鍛錬できることもほかの武道やスポーツに比して優れていると判断して選定した。

6　卒寿から振り返ってみた久里浜の青春時代の意義

後輩たちに話をする時には、先ず、私の人生における最良の選択は、保安大を志願し、入校後空手を選択して空手道部を創設し、空手道をこれまでそしてこれからも一生精進して行くつもりであると語ってきた。

航空自衛隊においても常に新しい分野の仕事をさせて頂けたし、空手は自分自身の修養の根幹となって、自衛官の時は、全自衛隊空手道連盟の理事長および副会長として、また、退官後も全自衛隊空手道連盟OB会の顧問として、自衛隊内における空手の普及および発展に寄与できた。在米期間中も、米国人に対して日本武道としての空手道の普及に貢献できた。

顧みて久里浜の青春時代は、我が人生を完全燃焼できる素地を培った時代であったと回顧している。

ねむの木の島　硫黄島

人の心に「平和の砦を」・・・
そして英霊よ安らかに！

河野　学　陸81

1　20年振りの硫黄島

本土から南に約1200キロ、私が初めて硫黄島にC-1で降り立ったのは、約20年前の11月だった。その時、私は富士学校戦史教養班長として全職種のFOC学生126名の硫黄島現地教育を担当した。その日